The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Grant R. Gillett, John McMillan, ”Consciousness and Intentionality”, John Benjamins, 2001
Author(s)	村上, 賢治
Citation	年報人間科学. 2003, 24-1, p. 113-117
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9277
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

Grant R. Gillett, John McMillan

Consciousness and Intentionality

John Benjamins, 2001

村上賢治

心の特性は何であるかということを考える時、大きく分けて、「意識」と「志向性」の二つの特性が挙げられる。最近の心の哲学の議論では、この志向性を自然化しようという様々な試みがなされてきた。例えば、ミリカンやドレツキといった哲学者は、志向性を生物学的用語で理解可能な表象的機能として説明している。その他の試みも、志向性と意識についての進化論的なアプローチによる自然主義的説明を与えるという方向性を持っている。

しかし、本書の著者はこのようなアプローチを採らない。また、志向性についての自然主義的説明を与えようとするのでもない。むしろ、本書での著者の立場は、「志向性とは心的であることの目印である」というブレンターノの観点から、意識の構造や志向性とは何なのかを考察するというものである。

本書の目標は、第一に、志向性と意識について現象学的な観点から迫り、その本性を説明することにある。内容ある思考を支えているのは意識であり、その内容に志向的に関わるような対象が意識を豊かなものにしているという事実を説明することが目標である。その際、現象学の伝統的な主張を、言語哲学や分析哲学の観点から、解釈するという方法が取られている点が特徴的である。第二の目標は、この志向性と意識の説明が、前述のような進化論的なアプローチやその他の科学的知見とどのような関係をもつのかということを示すことである。大きく分けて、本書にはこの二つの目標があると思われる。

本書は8章構成で、内容は多岐にわたっている。以下、大まかに

各章の内容を述べようと思う。1章「意識と志向性の基礎」では、意識と志向性についての基礎的な考察がなされ、社会や環境を重視した形での説明がなされる。これを受けて、2章「言語と意識」では、言語・概念獲得における発達心理学の知見を参考にしながら、言語・概念と意識は深く関わっており、またその関係に社会が重要な役割を果たしていることが示される。3章「意識の対象」では、意識内容とその対象の関係にまつわる諸問題を考察することを通じて、その関係が概念によって関係づけられたものであることを明らかにしようと試みている。4章「意識と行為」では、前章までの意識と志向性の説明を踏まえて、その成果を行為の分析に適用し、行為は志向的な内容を持ち、目的的なものであるということが述べられる。5章「意識と社会」では、自己や個性といった意識の特徴の形成に社会が影響していることが指摘される。6章「意識と脳」では、意識のスムーズな物理学的還元は困難であることが示される。7章「動物の意識」では、人間の意識と動物の意識の差を考察する中で、人間の行為やコミュニケーションの規範性が強調される。8章「例外的な意識」では、意識や志向性についての著者の見解から、意識の例外として扱われがちなフロイト流の無意識の説明を試みている。

先に挙げた第一の目標に関わる部分は、主に1章から3章、そして、その補足として4章と5章が当てられていると思われる。また、第二の目標については、主に6章から8章が当てられている。本稿では、ジレットとマクミランの意識と志向性の説明の中心をなしている、第一の目標に関する議論を中心に述べていこうと思う。したがって、第二の目標に関する議論についてはあまり立ち入らない。

1章「意識と志向性の基礎」では、意識と志向性の概念分析が中心となっている。意識を説明する際、我々は隠れ「デカルト主義者」になっていることが多い。しかしながら、「デカルト主義的観点」、つまり、内的な思考や内容は当人にとってのみアクセス可能で私的なものであるという観点は、思考の伝達や語の意味について深刻な事態をもたらす。自分の内的な思考を伝達する際、他人からは、どの語がどの内的思考に付随しているのかが確認できないので、語の背後にある意味や思考などの理解が困難になるのである。

これらの問題は、思考内容や意味についての公共性が必要であるということを促す。そこで、著者は、ウィトゲンシュタインの私的言語を巡る議論を参考に、「デカルト主義的観点」を退けながら、公共的にアクセス可能な意識モデルを考察する。それは、意味の使用テーゼに基づいて、語の意味の理解を公共的な場で確認できるようにし、次いで、そのような語の使用が正しい適用の仕方であるかどうかを判定する規則を要請し、そして、語や概念の正しい適用の仕方についての能力が獲得されたかどうかは、既にその能力を獲得している人物との判断の一致によって確かめられることになるという意識モデルである。したがって、思考内容や語の意味は公共的かつ規則支配的なものとして与えられる。

このモデルは、第一に、意識とは、語の正しい適用の仕方を既に獲得している人物の存在する社会に参加しているものだということ

を含意する。第二に、ある思考者の語や概念の使用は、他の思考者の存在や他の思考者との相互作用に基づいているということを含意する。また、第三には、「意識がある」といった心的属性に与えられるような語についても、その意味が周囲の人との判断の一致に基づいていることを含意する。このことから、意識とは、我々が判断を下しうる存在についての属性ということになり、我々が単に推測することしかできないような私的な状態ではないと考えられる。

しかし、我々はいかにして「意識がある」・「意識がない」という判断を下すことができるのか。著者によれば、それは、脳外科医が患者の意識レベルを判断するために、患者の反応性のレベルを測定し、基準と照らし合わせるのと類似した方法によって可能になると言う。つまり、環境に対して一定程度の認知的な反応、つまり、適切な言語的な反応や行為などを示す場合は、「意識がある」と判断するという基準を設けることによって、その判断が可能になるのである。そして、この認知的な反応と深く関わるのが、「志向性」に他ならない。

現象学の伝統では、「志向性」とは、意識はその本性として、何らかの対象についての意識であるという、「について性」のことであると定義される。意識は、志向的な働きにより、対象や事態の明確な内容を得るとされ、その働きは、単なる知覚的弁別とは異なり、対象の区別や比較などを通じてカテゴリー化に至るような概念的な働きを伴うものとされる。これを受けて、著者は、意識の志向的な内容は本性として概念的なものであると考える。概念は個人の関心に応じて、様々な異なる状況で使用される探索的な道具であり、意識の志向的な内容は探索的な働きの結果、形成される。ここにおいて、意識は、環境の事物に対する、選択的、分節的反応性の両方を含む概念使用や言語使用と本質的に結びついていることが示される。

2章「言語と意識」では、思考や言語といった高次の意識の働きが、いかにして意味についての外在化された説明と調和するのかが説明される。この章では、語の意味や概念が、語と内的思考との単純な対応の結果、形成されるという主張が批判され、概念が形成されるには、その概念を使用するための規則や、それが他の概念とどのような関係にあるか、などの人間の共同体における概念化の作業に参加することが必要になると主張される。

この主張は、概念の形成や把握についての発達の過程を追うことで説得的に述べられる。ここでは、子供の概念形成の発達は混同心的な分類段階、複合段階、擬似概念の段階、完全な概念の段階を経るというヴィゴツキーの説が参考にされている。その説によれば、子供の意識は、対象を主観的に捉えた特徴に基づいて語の下に分類する（混同心的な）初期の段階から、対象を対象間の実際の規則的な特徴に基づいて語の下に分類する（複合）段階への移行において、社会化された意識へと発達してゆくと言われる。したがって、彼の概念形成の議論は、子供はコミュニケーションの存在する環境に参加することによって、徐々に概念についての共有された規則に従うようになるという過程を示唆するものとして、見ることができる。そして、この点は、ウィトゲンシュタインの議論を参考にすること

によって補強される。助手が大工に「石板」と言われて、実際の石板を持ってくるには、語の正しい適用の規則の理解と、それを支えている人の存在する環境への参加が必要となるのである。

複雑な言語使用も、基本的には同じ仕方で成り立っていると筆者は考える。再びウィトゲンシュタインを参考にするなら、様々な石板の中から、特定の石板を持ってくるように指示する言語使用は、各々の石板の違いを伝達するような語や、その作業が他の作業とは異なるということを特徴付けるような意味を必要とし、その結果、語や様々な作業は区別され、複雑になるのである。

このように、言語獲得や概念形成の発達と、意識の発達が同時並行的になされることから、意識と言語、そして、意識と社会が相互に関係し合っていることが示される。

3章「意識の対象」では、ある対象について意識することは、思考者と対象の間に概念的に媒介された関係を伴うという見解が主張されている。筆者の見解は、意識とは思考者・表象的対象・事態の間の関係を伴うとする伝統的な論理実証主義者の見解と、意識は思考者と事態との間の直接的な関係を伴うとする素朴な実在論者の見解、双方と対照的なものとして提示される。

意識の対象の問題には様々なものがある。この章では、いかにして架空の存在について思考内容をもちうるのか、という問題が議論の中心である。これに答える仕方として二つのものが考えられるが、どちらにも問題がある。意識の対象は思考内容に他ならないと考えるならば、実在する世界の対象について何も知ることができなくなる可能性があり、逆に、意識の対象は単純に実際の対象と結びついているのだと考えるならば、架空の存在についての思考内容があるということが理解できない。ここで、思考内容とその対象の関係についてのジレンマに陥ることになる。

このジレンマに対して、筆者は、対象と思考との結びつきに関して、因果的な結びつきではない、純粋に概念的な特定化によって示されるような結びつきを考察する。まず、筆者は、思考とその対象との関係は論理的なものとなるというプライアーの見解を考察する。その関係とは、「Xは私の思考を真にするような対象である」というものである。この見解は、確かに架空の存在についての思考を持つことを可能にする。しかし、この見解は、ある人物の思考と実在する対象との関係が、どのような関係でもって結びついているのか、ということによる差異を反映しないので、十分ではない。プライアーの見解は、ある人物が存在する対象についての何らかの見知りを持っている場合と、そうでない人物の場合での対象の個別化の度合いが違うということを反映しないのである。そこで、筆者は、エヴァンスの考察を参考に、見知りによる差異を反映する説明方式を取ろうとする。この説明によれば、見知りによる差異は、「情報の結びつき」によって反映されることになる。見知りを持っている人物は対象から情報を得ているので、より詳細に対象を個別化することができるのだが、そうでない人物は対象についての情報しか得ていないので、より粗い個別化をすることになる。したがって、前者と後者とでは、各々の思考の対象についての実例を挙げる時に、この差

異が反映されることになる。

先に、概念を正しく把握したかどうかは、その概念の適用についての規則に従っているかどうかによって確認されるという考えが示されたが、この「情報の結びつき」についても同様のことが考えられる。つまり、ある人物がある対象を思考している時、その対象がまさにその思考の対象という関係に立つのは、当該の状況において、思考の対象とされる対象から得た情報が、その個別化を保証するある条件を満たしている場合であるということになる。むろん、思考者は思考の対象の実例を挙げるという実践を通じて、この条件がどのようなものであるかを把握しなければならない。おそらく、その条件の中には、対象がどのような時空的位置にあるのか、どのような種であるか、等々を情報から把握できなければならないという条件が含まれるだろう。しかし、このような条件ないし規則が公共的に共有されているのであれば、ある対象についての概念や思考は、ある種の傾向的なものとして思考者が持つもので、条件を充たす場合には、思考は実際の個別の対象との結びつきを持つことになるという関係を考えることができる。思考の対象が架空の存在の場合には、対象に結びつく概念が、条件を満たすような情報を待ち構えている状態にあると考えることができるだろう。したがって、架空の存在についての思考の場合でも、概念的な関係により、思考内容をもちうるということになるのである。

以上、「意識」と「志向性」の本性についての筆者の考察の一部を挙げてきた。しかし、本稿で触れなかった他の論点についても、筆者は基本的に同じ姿勢を保っていると思われる。それは、意識と志向性は単にそれ自体としてあるのではなく、言語や概念の使用、環境や社会との関係、あるいは他者との相互作用において、現われるような現象であるというものである。この見解に対して、言語と意識の関係が強く仮定されすぎているという反論があるかもしれない。しかし、人間が言語を用いる存在である限りは、その強弱の程度はあれ、意識と言語が密接に関係していることは否めない。また、著者は言語と意識という関係だけではなく、言語を成り立たせている社会に意識が参加するという関係を強調したいのだと思われる。本書は、内容が多岐にわたっているとはいえ、議論の流れは明快なので、心の哲学の入門書としては一読の価値があると言えるだろう。